イエスと自然
－キリスト教の自然観をめぐって－

船　本　弘　毅

はじめに

自然ということが、最近しきりに問題とされる。そこには、人間が追い求めつづけて来た科学技術の進歩が、自然を破壊し、恐ろしい公害や環境の汚染を招来し、また人間がその頭と手で開発製造した核兵器が、人類を存続か破滅かという危機に直面させているという現実がある。科学の進歩がそのまま人類の幸福につながるという考えを根底から問い直し、あらためて人間の問題を考え、自然を見直し、生命の尊厳を追求し、人類の共存・平和の問題を真剣に考え始めねばならなくなって来たのである。

本論は、先づ、聖書とキリスト教神学における自然の位置を問い、つぎにイエスにおける自然について考察し、最後に自然とわたしたち人間の問題を考えることによって、今日における「自然」の問題について、キリスト教は如何に発言することが出来るのか、ということを問おうとする一つの試みである。

関西学院農村センターの開設に尽力され、平和の問題と真摯に取組んで来られたJames Albert Joyce教授に感謝しつつ、この小論を捧げるものである。

Ⅰ．聖書とキリスト教神学における「自然」の位置

聖書においては、自然がそれ自体として問題とされるのは新約の時代に入ってからであり、旧約聖書では、「創造者」と「被造物」が基礎的な概念であった。そして創造者なる神と、神の被造になる天と地、また人間と動植物などが問題にされたと言って良いであろう。

用語的に考察しても、旧約聖書のヘブル語には「自然」にあたる言葉はなく、ギリシャ語の「コスモス（世界）」にそのまま対応する言葉もない。旧約では被造物は、「天と地」、「天と天の天」、「天と地、海、そこに住むすべてのもの」、「万物」などといったことばで呼ばれている。

新約聖書やヘレニズム・ユダヤ教における用法は多様であり、70人訳ギリシャ語旧約聖書では、「天と地」はそのまま「ウーラノス（大空、天）カイ、ゲー（地、世界、土地）」と直訳されており、コスモスはヘブル語には見られない「宇宙」の意味で用いられている。さらにヘレニズム・ギリシャ語では、「コスモス」は地上一般を意味する言葉として使用されている用例も出てくる。

そしてやがてその中から「被造物」の中の一部が分離されて、「自然」と呼ばれるようになるのである。すなわちギリシャ語のphysisに基づいて、動物や植物のように自発的に成長するものが、「被造物」の中で特定の位置を占めるものとして認められるようになって来て、やがて人間をとりかこむ環境世界全体を「自然」ないし「コスモス」として総称する用法も見られるようになった。

一方、新約聖書の中で、「自然」（physis）が直接の形で出て来るのは、パウロの手紙以後である。したがってキッテルの『新約聖書神学辞典』では、「自然」（physis）という項目の中に、「パウロにおける自然」という節はあるが、「イエスにおける自然」は見つからない。

初代教会においては、キリストによる贖罪ということが中心的な関心事であり、キリストへの信仰による罪のゆるしと、この世に対するキリスト者の勝利が訴えられ、明確になされている。それゆえに、新約聖書の視点は救済論に集中され、そ

こから創造論の再解釈が行なわれ、救済の仲保者であるのみでなく、創造の仲保者としてのキリストによる「無からの創造」にまで、徹底的な再解釈が行なわれることになるのである。

もちろん新約聖書の中には、たとえば山上の説教においてイエスが「空の鳥、野の花を見よ」といった形で、直接「自然」という言葉ではないとしても、自然の讃美と解釈することの出来ることばを語っておられるのを見出すことができるであろう。しかしこの句は、後で再び取上げるが、元来自然を讃美する目的で語られたものではなく、キリスト者の新しい倫理的な生き方として「思いわずらうな」ということを勧める文脈の中で語られているのであって、それはイエス・キリストの救済論的出現に深く根ざした倫理的指針であると解すべきであろう。

古代キリスト教はギリシャ文化の世界に発展して行ったのであるが、この救済論中心の視点は、プラトニズムの優位のもとに解釈され、「自然」の概念は軽視され、禁欲的な自己否定、自然否定の下に、精神としての霊魂の救済ということが重視されていった。

周知の如く、ギリシャには二元論的思考が支配的であり、光と闇、霊と肉といった二元的、対立的見方が強く、見えるものは見えないものの影にすぎず、価値低きものと見なされたのであるから、古代から中世に至るまでキリスト教世界では「自然」は正当な位置を与えられることなく、蔑視され、軽視されて来たのであった。そこでは観念論が優位を占め、現実的なもの、具体的なものは汚れたものであるという考え方が圧倒的に強かった。ギリシャはオリンピックの発祥の地であるが、ギリシャ人は運動好きであり、運動そのものを尊び楽しんだというのではなく、むしろ目に見えるみにくい肉体を少しでも見栄えあるものにするために運動に励んだと言われている。かかる状況においては形而上が重んじられ、教会では、お金のこと、食べ物のこと、性に関すること、人間の楽しみについて語ることは低俗なこととして避けられる傾向を産み出して来た。

したがって「自然」がそれ自体として問題とされることは少なく、反価値としての自然が関心の中心になって行ったと言える。自然やこの世に係わることは、堕落とみなされ、俗なること現実的なことは、いやしいこととみなされて来たのであった。

堕落して罪に深く浸透された人間は、自然の低評価と深く結合された。救済論的視点からは、自然は「不自由」の総体とみなされ、精神の優位のもとに克服さるべきものと見なす傾向が強かった。

このように近代に至るまでの長い歴史の中で、キリスト教は「自然」を軽視し、低い価値しか与えず、プラトニズムの自己否定、すなわち自然否定の伝統と深く結びついて来た、と言えるであろう。

それに対して近世以後、現代にいたるキリスト教精神史は、自然をあらためて捉え直すことを迫られ、自然の再評価と取組まねばならなくなったと言えよう。いわば自然から問いかけられ、答えを迫られることになったのである。ルネッサンスの運動は、自然的人間の側からの反撃の口火であると見ることもできる。

たとえば、キリスト教芸術の中にそのような推移を見ようとすれば、ヴィザンチウムの時代には天に凱旋するキリスト像が好んで取上げられ、宗教画の中心的画題をなしていたが、ルネッサンスの時代になると、勇ましいイエスではなく、十字架上にリアルに死んで行くイエス像が中心になって来る。そしてさらに近代にいたると、イエスの像そのものは画面からは直接的には消滅して、ミレーの晩鐘に見られるように、自然の中で敬虔に祈る人間の姿が、キリストにとって代って、よく画かれるようになって来るのである。

このような変化は、軽視されていた「自然」の地位が回復したことを示すと共に、伝統的な敬虔はより一層内面化され、両者が新しい形で調和される傾向を示すようになった、と言うことができるであろう。

さらに宗教的寛容の思想は、近代の自然的人間に基づく、ヒューマニズムや自然法にも目を向けさせるようになり、そのことは人間の本体とか人間理性の主張にも、場を開くことになって行った。さらに近代科学、とくに自然科学の驚異的な発展は、このような多くの領域に見られるいわゆる「自然の復権運動」に拍車をかけることになっ

たと言ってよいであろう。

キリスト教において「自然」という場合には、聖書的概念としては「地とその上に住むすべてのもの」が問題にされていると見て良いのである。そして自然のいわば本来的な在り方と、現実的な在り方の両面の意味がそこでは問題とされていると言えるであろう。創世記の一章と二章に見られる天地創造における「地とその上に住むすべてのもの」の本質的な在り方と、ノアの洪水によって悪がぬぐい去られ、新しい地に神の祝福を受けて住むようになったあらゆる生き物たちの現実的な在り方（創世記八－九章参照）が、創造者なる神との関係の中で、再解釈されることが求められるであろう。また新約聖書においては、イエス・キリストとの関連の中で、救済論的な観点から自然を見直し、再解釈することが求められるであろう。

Ⅱ．イエスと自然

イエスについて知る資料は限られている。キリスト教の世界以外には、イエスについて語る資料はほとんどないと言って良い。わずかに、『タキトウスの年代記』、『ヨセフスの古代史』、律法解説書である『タルムード』などに、イエスに触れた部分があるのみである。そしてこれらのイエスについての言述もイエスが存在したこと、その存在が当時の社会において無視し得ないものであったことの証明にはなるが、それ以上のものにはならない。

キリスト教内の資料としては、新約聖書が唯一の資料であるが、イエスの生と死についての一次資料は福音書、厳密には、マタイ、マルコ、ルカの共観福音書に限られると言って良いであろう。

共観福音書に見られるイエス像は、シナゴグで教えた律法学者や祭司たちと異なり、ガリラヤ湖周辺の村々をたずね歩いて民衆と交わり、折りに触れて神の国について語られた素朴な巡回伝道者であり、そこではガリラヤの自然がしばしばその語りの題材に用いられている。思いつくまま順不同にあげて見ても、多くのものがある。たとえば、

空の鳥・野の花（マタイ6：25－34、ルカ12：22－34）

種まきのたとえ（マタイ13：1－9、マルコ4：1－9、ルカ8：4－8）

木とその実の関係（マタイ12：33－37、7：16－20、ルカ6：43－45）

ブドウ園と農夫のたとえ（マタイ21：33－46、マルコ12：1－12、ルカ20：9－19）

いちじくの木のたとえ（マタイ24：32－35、マルコ33：28－31、ルカ21：29－33）

100匹の羊のたとえ（マタイ18：10－14、ルカ15：3－7）

ブドウの木のたとえ（ヨハネ15：1－10）

などが挙げられるであろう。これらはイエスと自然の関係の深さを告げており、イエスは自然を愛くしんで生き、自然を通して多くのことを語り教えられた、と言って良い。

和辻哲郎氏は古典的な名著と言われる『風土－人間学的考察』の中で、聖書の背景になった風土（自然）は、沙漠地帯のそれであり、人間がそこに住むことを拒否する厳しいものとして捉え、次のように述べている。

「紅海の沿岸、特に歴史的に有名なシナイ山やアラビヤ沙漠のあたりに至れば、旅行者は死そのものを印象するごときこの風土を生くることによって、旧約聖書を新しく読みなおそうとする衝動を感ずるであろう。選ばれたる民が渡って歩いたのは、かくも物すごい砂の海、岸片の海であった。彼らがながめたのはあの岩骨のみの山脈、『死せる山』であった」。（48頁）

聖書の民にとって自然とは、かかるものであった。そしてその様な自然の中で、イエスは「空の鳥を見るがよい。まくことも、刈ることもせず、倉に取りいれることもしない。それだのに、あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる。……野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、あなたがたに言うが、栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった」（マタイ6：26－29）と語りかけられたのであった。

筆者は1974年に、聖地を訪れる機会を与えられ、エルサレムを中心に開かれた一ケ月に亘る聖書に関するセミナーに出席し、聖書の背景になった多くの地をたずねることが出来た。ヴィアドロ

ロサからゴルゴダの丘に至る風景、エルサレムの新旧市街の対照、ピリポカイザリヤの美しさ、クムラン周辺の荒地、死海のほとり、マサダの城跡、ナザレの村、さまざまな風景が今も鮮やかに目前に浮び上ってくるのであるが、緑の少ない白っぽい沙漠の風土は強烈な印象として残っている。この地を旅して福音を語られたイエスと弟子の一行の姿を想像すると、それが苦難にみちた伝道の旅であったことに胸の熱くなるのを覚えたのであった。

イスラエルの歴史は、周知の如く、決して楽なものではなく、平坦なものでもなかった。小さい弱い国であり、自然や資源に恵まれることもなく、しかも周囲には古代文明の発祥地となったような強国、大国があり、エジプト、アッシリヤ、ペリシテ、バビロンといった国々のはざまで右往左往しながら、苦しみつつ生きたのがイスラエルであった。

それは人々に、本当にわたしたちは神の選びの民なのか、これが選びの民の歴史なのか、神は本当にいるのか、といった切実なる問いを問わせざるを得なかったのである。しかしそのような苦難の連続のような歴史の中で、ダビデ王朝の時代は統一独立国家としてイスラエルは栄え、それに続くソロモン王朝はその遺産の上に栄光の時代を築き、栄華をきわめた時代であった。イスラエル史の唯一の華やかな時代であったと言えるかも知れない。

しかし、イエスは言うのである。そのソロモン時代の栄華のきわみも、今日の時代のもつ物質的、文化的、政治的な力や繁栄も、この地に咲く野の花の一輪のいのちの美しさには、およばない、と。

そしてイエスは空の鳥が生き、野の花が咲くことの中に、神の手のわざを認め、弟子たちや群衆に向かって、「きょうは生えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあろうか」と言われた。

したがって、これは手離しの自然讃美ではない。野の花の美しさが一面的に強調されているのでもない。ましてやわずらわしい人間社会の現実から、静かな美しい自然への逃避が勧められているのでもない。人間もまた野の花と同じように、はかない存在であり、いつか病み、衰え、そして間違いなく朽ちてゆく存在である。しかもそのような、はかない存在にすぎないものが、神によって美しく装われている。この場合「美しい」とは、ただ見栄えが良いとか、人の目を引くといったことではなく、ノーブルで、尊いという意味が含められている。イエスはすべての生けるもの、特に人間に対して、その生命に畏敬の念を持っている。イエスは人間をその衣装によってではなく、地位や持物や知識によってではなく、それらすべてを取り除いた、はだかで生れ、はだかで死んでいく人間をいつも見すえ、問題にされたのである。女も子どもも、貧しい者も富める者も、病人も健康人も、罪人も遊女も取税人も、みな同じひとりの人間と見たのであった。ひとりひとりの人間が、個として独立し、かけがえのない生命を与えられて生きている尊い存在である、と理解されたのであった。

マルコによる福音書第8章36－37節には、「人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか」という有名なイエスのことばが記されている。ここに出てくる「命」、プシケーは①人間にも獣にも与えられている自然な生物的生命である。②しかもそれは人間の肉体や魂のように、一部分ではなく、わたしという人間そのもの、今、ここに生きている一人の人間のことである。すなわち、このプシケーは他者、すなわち神と人と物質に係わりつつ、自から責任をもって決断すべき自由な主体としての一個の人間である。したがってイエスは、このプシケーを死によって消滅するのではなく、神の前に立たされて、救いか亡びかが決定される魂、むしろペルソナ（人格）と見ているのである。

イエスは、自然な生物的生命と自由な主体とを分離してはいない。むしろ人間を、自然と精神、生命と主体、生物と人格との不可分な統一体としてとらえている。それは旧約聖書から一貫して流れている伝統的な考え方であり、ギリシャ的ヘレニズム的な理解、いわゆる二元論的な見方とは明確に区別されねばならないのである。

人間は誰しも衣食住のことで思いわずらい、そ

のために働くことによって自分の生命を守ろうとし、互に争い、傷つき、遂には死んで行く存在である。あるいは、うまく成功を収め、新しく建て直した大きな倉庫に多くの食糧をつめ込んで、さあ安心せよ、食え、飲め、楽しめと有頂点になっていた金持ちに対しては、主は「愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか」(ルカ12：20)と語られた。

すなわち、イエスにとって、人間の生命の保証は食物や持ち物の内にはない。人間の手中にあるものでもない。権力者が自由にし得るものでもない。人間の生と死、今とのちとを支配しているのは、神であり、神が自由になしうるものだと言うのである。

このようにみてくると、イエスは人間や自然をそれ自体として語るのみではなく、神との関係で語り、神との関係において問題にしていることが、明らかになって来るであろう。その事は逆の視点から捉えれば、神をそれ自体として形而上学的に語ることをせず、人間との関係において語るということにもなるであろう。人との関係において神が、神との関係において人が、真実に問題とされるのである。

イエスにおいて、神は自然の中で、むしろ歴史の中で、特にイスラエルの歴史の中で、生きて働いた方であった。イエスの神は聖書の神であり、聖書を通して語りかける神であった。したがって、アブラハムの神であり、イサクの神であり、ヤコブの神である神がまた、わたしに対して、汝として語りかけてくるのであった。

かくして、神はすべての内に在って、しかもそれを越えて、支配している。神はすべてのものを造り、それを支配しているのである。神は、自然法則とか運命とか言われる宇宙の法則ではなく、非人格的なものでもなく、創造者として支配者である。神は自然と人間と歴史の主として働く方である。自然や人間や歴史のはかなさを充分に認めつつ、しかもそれらを支配したもう神である。

イエスにおいて、「自然」は、このようなものとして存在の意味と目的とを持つのである。したがって、はかない、弱い存在であり、虚しいものでありつつ、人間も自然も、この神のみ手の中で、生かされている生を精一杯生きることが求められているのである。

Ⅲ. 自然とわたしたち

最後に、キリスト教と自然という課題を、ディートリッヒ・ボンヘッファーの『倫理学』を手掛かりにして、さらに深めたい。

ディートリッヒ・ボンヘッファーは、1906年2月4日現在はポーランド領であるが、当時はドイツ領であったブレスラウで生れ、1945年4月9日フロッセンブルクで、この地が連合軍によって解放されるわずか数日前、反ヒットラー運動に加わったかどでナチスに処刑され、39才の若さで世を去った神学者である。

わずか39才の生涯、しかも最後の2年は獄中にあって行動を封じられていたのであるから、極めて短い限られた人生であり、その思想も未完成であり、断片的であることは否定できない。しかし1930年代の危機的状況にあったドイツの地で、真実に生きることを追究して誠実に生き、行動した彼の生涯と思想は、広く大きな影響を人々に与え、第二次世界大戦後のキリスト教界、および世界の思想界に深く決定的な影響を与えたと言われている。

彼の主著とも言うべき『倫理学』は、未完成のまま残された断片を、友人であり、良き理解者であるベートゲが、編集して死後出版されたものである。この書の中で、ボンヘッファーは「究極のものと究極以前のもの」(Die letzten und vorletzten Dinge)というユニークなテーマを論じている。

ボンヘッファーの生涯を貫いたモティーフは「今日のわたしたちにとって、キリストとは誰か」ということであった。彼はこの時代に、キリストにあって生きる意味を問いつづけたのであった。したがって彼の思索の中心的命題は、「この世の現実の中に入りたもうたイエス・キリストにおける神の現実」ということであり、この根本命題は、もはやこの世ぬきにキリストを考えることも、キリストぬきにこの世を考えることもしないということであり、このボンヘッファーの立場が「究極のものと究極以前のもの」という章で論じられ、

明かにされているのである。

ボンヘッファーは言う。「この事から、決定的に重要なことがでて来る。それは究極以前のものが、究極のもののゆえに保持されていなければならないということである。究極以前のものを勝手に破壊することは、究極のものに重大な損害を与えることである。たとえば、人間生活から人間であることに相応しい条件が奪われるならば、恵みと信仰による人間の生の義認は、たとえそれが不可能にはならないとしても重大な阻害を受けるのである」(Ethik s.142)。

かかる視点から、ボンヘッファーは「自然」に注目する。彼は「自然」という語を、自然主義的に、人工的なものに対する語として用いるのではなく、キリスト論的に用いている。自然の概念はプロテスタントの伝統では軽んじられて来た。したがってキリスト教では、カトリックの倫理のみが自然を問題として来たのであるが、自然を軽視したことはプロテスタント思想にとって重大な本質的損失であり、自然の意味の再発見ということはプロテスタントに課せられた緊急の課題であると言えるであろう。

ボンヘッファーは、自然は単にキリストのために存在するのではなく、キリスト自身がこの世の自然生活のために存在するのである。自然的なものは堕落以後、神によって保持される生命のかたちである。(Ethik s.154)。それは堕落した世界によって、あるいは、その権威によって決定される何物かではない。したがって、それは救済史の用法である世界の「保持」目的のための手段によって義とされ得ないのである。

自然的生活は、その有効性をキリスト自身から受けているので、キリストと共なる生活の前段階というように理解されてはならない。キリスト自身がこの世に、すなわち、自然的生活へ入り込みたもうた。そして彼を通して自然的生活は、究極のものへ向う究極以前のものとなるのである。

かくしてボンヘッファーは、このような根拠に立って、われわれは他者を自然的生活へ招くことができ、またわれわれ自身、自然的生活を営む権利を有するのである、と主張する。究極以前のものは、キリストの来臨のために、神によって保持され、維持されているゆえに尊重されねばならないのである。

「生が保持されている限り、自然的なものは、ふたたびその道を歩む」という確信に基づいてボンヘッファーは、人間と人間の自然的な関係と同じように、自然の権利と義務に関する彼の解釈を展開している。

さらに「身体的生活の権利」と題される節では、性、食物、リクリューションといった身体的喜びの正当性を弁護し、体罰、拷問、安楽死、殺人、自殺、人口調節などの諸問題を具体的に、かつ極めて大胆に論じている。

個々の問題を考察する余裕はないが、彼の基本的立場は次のようなものである。すなわち、身体的生活は一般的な生と同じく、目的のための手段であるのではなくて、目的それ自体である。キリスト教倫理によれば、肉体はその死によって、魂が永遠に解放されるところの牢獄というギリシャ的な考え方は、否定されなければならない。なぜなら、人間が身体的存在であることは、神の意志であり、身体性は目的それ自体であることができるからである。ボンヘッファーは、身体的生活の持つ意味は、決して何かほかの目的に従属するものではなく、それに内在している喜びへの要求がみたされる時に初めて、その意味は充分に汲みつくされるのであると言う（Ethik s.168参照)。

神は究極以前の現実の只中で、究極的な言葉を語りたもう。すなわち、神の言は現実のただなかで是認されるべき具体的な戒めなのである。神が人間のために、この世に構成したもうた現実に参画することが、今日の時代におけるわたしたちの倫理的な責任なのである。

かくして、倫理の究極の言葉は、罪人が恵みによって贖われ、人間の存在は神の現実と共に在るということである。ボンヘッファーにとっては、「ただ一度限り善であるものが問題なのではなくて、キリストが如何にして、今日、ここで、われわれの間に形をとりたもうかということが問題である」（Ethik s.91）のであった。

おわりに

キリスト教思想、特にプロテスタント神学においては、自然の問題を充分に検討し、理解して来

たとは言えない。しかし前述したように近代科学、近代医学の目覚ましい発展の中で、逆に自然破壊が行なわれ、自然の破滅の危機が現実の問題としてわたしたちの前に立ちはだかって来ている現在、わたしたちは「自然」を受けとめ直し、その意味を再発見し、自然と人間の共生の問題を真剣に追究せねばならないであろう。そしてそのことは、まさに主イエスの意図したもうたことであると言うことができるのである。

注

本稿は1992年9月宝塚YMCAが主催した聖書セミナー「聖書の世界－聖書と自然」で行った講演に基づいている。